【曲目解説】

交響曲（シンフォニー）という音楽形態は、ハイドンが形式的に整備したと言ってよいかと思われますが、作曲家が最も力を入れる記念碑的作品、オーケストラによる壮大な作品へと発展したのは、やはりベートーフェンの９つの交響曲によってでしょう。そういう「大きな」交響曲を聞き慣れた耳には、本日演奏する「32番」と（後世の手によって）番号付けられた交響曲は、なんと「小さな」作品でしょう。楽章はたった一つ、「急・緩・急」の三部形式で書かれています。もっとも「シンフォニー」の元となった「シンフォニア」は、オペラや合唱曲（カンタータ等）の器楽だけの前奏を指していました。それが独立し、（多楽章の）器楽曲を指すようになり、さらにクリスチャン・バッハやハイドンなどにより、オーケストラの完成された分野へと成長したのです。モーツァルト（1756・１・27～1791・12・５）がこの作品を書いたのは、父親からの度重なる催促で、パリからザルツブルクへと帰った1779年の４月です。この曲の場合、モーツァルトが古い時代の「シンフォニア」を意識して作曲したということはなさそうで、何人かの音楽学者が推測するように、なんらかの劇か歌劇の序曲として書かれたか、パリのオペラ･コミックで好まれていた序曲の形を、〈序曲＝交響曲〉という混合形式で、パリ土産として作曲したのではないかと考えられます。

1877年は、アントニーナ・ミリューコヴァとの結婚の失敗という困難にも関わらず、チャイコフスキー（1840・５・７～1893・11・６）の創作活動で最大の頂点を成す年でありました。ロシア交響楽の金字塔となった第４交響曲を完成し、翌年早々にはロシア・オペラの代表作と認められた「エヴゲニー・オネーギン」を脱稿しています。さらに1878年３月、知人からラロのスペイン交響曲の楽譜を見せられて刺激を受け、ヴァイオリン協奏曲の作曲に着手することになります。ヴァイオリン協奏曲は、彼のピアノ協奏曲第１番と似た運命を辿ります。最初に献呈した、ペテルブルグ音楽院の教授で名ヴァイオリニストのレオポルド･アウアーは、「技術的に無理だ」と奏法上の問題を指摘して演奏を断ってきました。1889年12月にアドルフ・ブロツキーという若いヴァイオリニストによってウィーンで演奏された時は、有名な音楽評論家、ハンス・リックが「悪臭を放つ音楽」と酷評しました。しかし後に、アウアーは、この曲を見直し、自分のレパートリーに加え、しばしば演奏するようになります。曲も、メンデルスゾーンなどに並ぶ名曲との評価を確立していきました。

ジャン・シベリウス（1865・12・８～1957・９・20）は、周知のとおり、交響詩「フィンランディア」などの作品で知られる、フィンランドを代表する作曲家です。５歳の頃から叔母の手ほどきでピアノを習い始めた彼は、その音楽的才能を早々に発揮し、作曲法を書籍で独習、次々に作品を作るようになります。ベルリンとウィーン留学の後、1892年帰国し、「クッレルヴォ交響曲」で一躍フィンランド楽壇の注目を浴びることとなり、以来国際的にも認められる大作曲家の道を歩みます。第５交響曲は、1915年、シベリウス生誕50年の記念行事のために作曲されました。その年の４月、数年前からの齧病で死を身近に感じていた彼は、散歩の途中、春の気配にインスピレーションを得ます。「今日11時10分前、16羽の白鳥を見た。人生最大の感動の一つ！神よ、なんという美しさ。白鳥たちは長い間私の頭上を旋回していた。そして輝く銀のリボンのように太陽の光のかすみの中に消えていった。自然の神秘と人生の憂愁！第５交響曲フィナーレのテーマ、トランペットのレガート……。長い間真の感動から遠ざかっていた私に、これは起こるべきであった。こうして今日、私は聖なる殿堂にいる。1915年４月21日」

【特別寄稿「チャイコフスキーの生涯」】　尾上政雄

1840年、鉱山監督官の父、フランス人の母との間に生をうけ、ペテルブルグで法律を学んだ。その頃に音楽に親しみを覚え、3年間法務省の役人を勤める傍ら、ペテルブルグ音楽院で音楽を学んだ。卒業後、当時新しく出来たモスクワ音楽院の教授に任命された。この頃の作品（初期の交響曲、幻想序曲「ロメオとジュリエット」等）は、成功を納めなかった。チャイコフスキーの53年の生涯には多くの危機があった。中でも彼が多感な14歳の時に、最も熱愛していた母を失うことになる。母に対する彼の思慕は、生涯消えることはなかった。

作品の上では、「ヴァイオリン協奏曲」「ピアノ協奏曲」、数々のバレエ音楽、交響曲第4、5、6「悲愴」、加えてオペラと、今日人々に親しまれている曲は、いずれも、時にセンチメンタルに、時にロマンティシズムに溢れ、我々の心に深く染み込んでくる。それら美しい旋律をもった曲を作った彼は、少年期から病的なほど極端に内気で、ふさぎや、はにかみやであったために恋愛や結婚では幸せをつかむことは出来なかった。

その上、同性愛の傾向もあった。とはいえ、彼が全く女性に対して関心がなかったわけではなかった。若い頃には義妹のヴェラ・ヴィッドヴァに愛着を感じ、曲（パプサルの想い出）を送ったりした。また後には、ベルギーのオペラ歌手に執着し、婚約までしたこともあったが、いずれも彼が彼女達に示した愛の形は、精神的なもので、肉体的なものではなかった。

1877年の春チャイコフスキーは、彼に熱烈な求愛を続けていた、モスクワ音楽院の教え子、アントニーナ・ミリューコヴァと俄かに結婚するが、この結婚は彼が同性愛者だという風評を封じるためのものであった。所謂擬装結婚であり、彼にとっては、愛のない結婚であったから、すぐに破綻をきたし、彼は自殺未遂を起こす。彼の生涯で最も不幸な事件となった。

チャイコフスキーは、この傷心を癒すために、ドイツ、スイス、イタリアに出掛ける。そのスイスで、有力なパトロネス、フォン・メック夫人との出会いがあり、世にも不思議な関係が始まることになる。メック夫人は、富裕な鉄道経営者の未亡人で、二人は絶対に会わないという条件で、年額6000ルーブルの年金をチャイコフスキーに提供するという申し出をする。この申し出はその後13年間続いたが、その間二人は一度も積極的に会おうとしたことはなく、チャイコフスキーは、文通と作品の献呈によってのみ、夫人との関係を深めていった。中でも、交響曲第4番ヘ短調は、イタリアのサンレモで完成し、交響曲のプログラムについて詳しく書き記した書簡と共に、メック夫人に献呈された大作である。

チャイコフスキーは、死の前年（1892年）、マリンスキー劇場からの依頼で作曲されたバレエ「くるみ割り人形」の上演に際し、再び彼と甥との同性愛が発覚、時の政府に知れることとなる。翌年問題の交響曲第6番「悲愴」の初演（1893年10月28日、ペテルブルグにおいて、チャイコフスキー自身の指揮）9日後に急死する。「生水を呑んでコレラに罹っての病死」とされた。彼の死は、同性愛というスキャンダルを封じようとする周囲の圧力による、砒素服毒自殺であった。享年53歳。

＊尾上氏は、以前から毎回アンサンブル・ディマンシュの演奏会に来て頂いている、草加市在住の音楽愛好家です。今回、チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲を取り上げるに際し、原稿をお寄せ頂きました。

＊なお、チャイコフスキーの死因については諸説があります。